歴史小説
直刀勝負

島内景二

新

島内景二
しまうち・けいじ／一九五五年生まれ／電気通信大学助教授として教鞭をとる一方、文芸評論の分野でも活躍する。『源氏物語』、お伽草子などの幅広い文学研究を土台に、歴史小説を古代に遡る日本文学の本流と位置づける新時代の文学評論を目指す。
著書に『御伽草子の精神史』『源氏物語の話型学』『日本文学の眺望』（以上ぺりかん社）『日本人の旅』（ＮＨＫブックス）『剣と横笛』（新典社）『エンデのくれた宝物』（福武書店）『光源氏の人間関係』（新潮社）『読む技法・書く技法』（講談社）『源氏物語の影響史』（笠間書院）などがある。
博士（文学）（東京大学）

歴史小説　真剣勝負
二〇〇二年四月十日　第一版第一刷発行

著　者　島内景二
発行者　菅　英志
発行所　株式会社新人物往来社
東京都千代田区神田錦町三―一八―三　錦三ビル
電話〇三―三二九二―三九三一（代）
振替〇〇一六〇―五―一五一六四三
印刷所　共同印刷㈱
製本所　小泉製本㈱
ISBN4-404-02963-2 C0021

Printed in Japan　（定価はカバー・帯に表記してあります）

歴史小説　真剣勝負

目次

新人物往来社

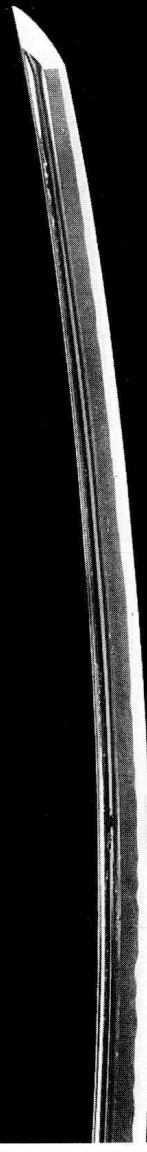
第一番　文学の領域と、その復権……6
第二番　王朝物語、あるいは真実と虚構の間……17
第三番　お伽草子の挑戦……28
第四番　『南総里見八犬伝』の達成……38
第五番　『小説神髄』の歴史小説論……50
第六番　復活する尾崎紅葉……61
第七番　文学を超えた文学者・森鷗外……72
第八番　「ちッ、ぺッ、ぷッ」の山田美妙……83
第九番　漱石の同時代人・半井桃水……104
第十番　捕物帳の発明者・岡本綺堂……115
第十一番　股旅物の成立・長谷川伸……126
第十二番　大衆文学の命名者・白井喬二……137
第十三番　永遠の武蔵像・吉川英治……148

第十四番　笑う鞍馬天狗・大仏次郎……159
第十五番　不完全な完成体・丹下左膳……170
第十六番　伝奇の魅力と神髄・土師清二と国枝史郎……181
第十七番　ある大衆文学者の肖像・村松梢風……192
第十八番　歴史小説評論家の出現と、その使命……204
第十九番　テレビ時代のヒーロー・笛吹童子……216
第二十番　坂本竜馬の文明論・司馬遼太郎……228
第二十一番　俳諧的な死生観・藤沢周平……239
第二十二番　六年間の噴火の傷痕・隆慶一郎……250
第二十三番　「かわせみ」と「はやぶさ」・平岩弓枝……262
第二十四番　歴史小説の未来、そして安部龍太郎……273
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　田中　実

歴史小説　真剣勝負



島内景二

第一番　文学の領域と、その復権

はじめに

二十一世紀が開幕した！

少年の日にＳＦ小説で夢見たバラ色の「未来社会」は、現実のものとなるのだろうか。それとも、懐疑的なジョージ・オーウェルの未来小説のように、夢は無残に裏切られることになるのだろうか。少年の日の数々の「約束」は、大人になったかつての少年たち自身の手によって「みんな壊されてしまう」のだろうか。

それにしても、二十一世紀という時代は、「文学を愛する人間」たちに何をもたらしてくれるのか。もしも新世紀に文学が寄与できるとすれば、わたしたちは今どのような小説を書き、どのような姿勢で小説を読まなければならないのか。

過ぎ去った二十世紀は、あらゆる現代文明に対する懐疑心を理性的につきつめた。その結果、

「小説ジャンルに対する〈否〉」の段階の次には、「文学に対する〈否〉」が宣告されてしまった。

わたしは、思い出す。アルベール・ティボーデの言葉を。懐かしい蝶のような郷愁をこめて。

婦人の部屋が小説の経過する場所となるのは、つまりその部屋は第一に小説の読まれる場所……いや、むしろそこで小説に耳をすまし、小説を夢み、小説を生活する場所であるからだ。

（生島遼一訳『小説の美学』）

今日、このように没入的な精読を試みている「読者」が、どれほどいるだろうか。そして、それにふさわしい「作品」がいかほど生産されているだろうか。

わたしは、先人たちが築きあげてきた「歴史小説」こそが、まさにこのような良質の「読者」を獲得しえた希有のジャンルだと考えるのだ。わたしを含めて、膨大な「少年少女の部屋」が歴史小説の読まれる場所であり、人生と社会の真実が贅沢な個人教授で教えられる教室でもあった。むろん、歴史小説を生活する場所としては、「大人の部屋」も「老人の部屋」もあった。奇蹟的にも、これらの部屋部屋だけは新しい「廃仏毀釈」とも言える二十世紀末の文学破壊の波を免れることができた。

文学を再生させる運動の始まりと、文学の領域を失地回復させる情熱の高まりが、何よりも求められている。二十一世紀の文学復興と、文学の領土の再獲得と、再膨張は、この「失われた文学地平」である歴史小説の領域から始められる！

日本文学のリアリティ

未来を切り拓くためには、過去を凝視せねばならぬ。本書では、まず文学とは何であったのかという流れをつかもう。そのために、神話・物語・お伽草子をかえりみる。そのうえで、吉川英治・隆慶一郎たちの「歴史小説」の代表作を取り上げる。

それらがどのような歴史的環境から産み落とされたかという「研究」ではなく、二十一世紀の人間に何をもたらしてくれるのかを問いかけようではないか。天皇制・植民地支配・貧困・戦争・民主主義・高度経済成長・バブル・デフレ不況などの特殊な「要因」によって誕生した歴史小説の名作群は、しかしながら、経済構造や社会構造が変転しても永遠に古びない生命力を保っている。だからこそ、現代人にも読み継がれている。そのような「文学の生命力」の秘密を、「古典」の中に凝視したいのだ。

既にある種のレッテルを貼られてしまった古典の評価を変えることで、新しい「文学の読み方」が切り拓かれる。それが、「新しい書き方」の小説を芽生えさせることにもなろう。古くて新しい文学、それこそが真に生きた文学である。

今回は、古代神話を歴史小説的に読み解こう。神話には、現実には起きなかった荒唐無稽な出来事が語られる。そもそも、登場人物としての「神々」は非在の架空の概念である。しかもその内容たるや、善であれ悪であれ空前絶後の卓越した超人（だからこそ神なのだ）が、不思議な誕生をし、

前人未到の偉業や悪行を体験し、不思議な死に方をしてゆくという信じがたいものばかりである。「リアリティ」を求めた近代自然主義文学が、どこにでもいそうな平凡な主人公が誰しもが体験するであろう平均的な喜怒哀楽の果てに普通に死んでゆく姿を描いたのと、何と対照的なことか。

もしかしたら、「純文学」と呼ばれる近代自然主義は、かえって読者の共感を失い、文学におけるリアリティを喪失させてしまったのかもしれない。神話の世界に書かれている内容は虚構の作り話なのだが、現実世界に存在している氏族・制度・習慣・遺物などの「起源（アルケオロジー）＝始まり」を説明するために創作されたものである。神話に書かれていない「真実」が、書かれている虚構の世界のリアリティを保証していた。本当のことを本当のように書こうとした近代純文学の行きづまりと、本当の世界の「いわれ」をフィクションで説明しようとした神話の古びない生命力とを比べてみると、まことに感慨深いものがある。

神話の二大テーマは、英雄の「怪物退治」と「恋愛遍歴」である。吉川英治に『剣難女難（けんなんじょなん）』というタイトルの小説がある。そのネーミングは、それがまさに神話の末裔として位置づけられる作品であることを示している。

ところで、現代の閉塞した純文学を圧倒的なパワーで打破し、生前にはノーベル文学賞の有力候補と目されていたのが中上健次（なかがみけんじ）（一九四六～一九九二）である。中上健次の文学は、神話よりも過激に「性と暴力」を描く。彼は「歴史小説」こそ書かなかったけれども、『千年の愉楽』や『日輪の翼』などは、歴史小説の源流としての神話を日常生活とオーバーラップさせることに成功している秀作だと思う。中上健次は、小説を新世紀に復興させようとした（広義の）歴史小説的手法の作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

家だったと言えよう。その早すぎる死は、惜しまれてならない。

男（英雄）から見た「怪物退治」と「恋愛遍歴」を女の側から見れば、「怪物に食われそうになる危機」と「男からの求愛」になる。男の能動的視点と女の受動的視点がぴったりと絡み合って、神話の世界はまことにダイナミックに展開する。

『古事記』と『日本書紀』の語る神話のクライマックスをいくつか挙げるとすれば、イザナキ（イザナギとも言う）の「黄泉（よみ）の国」訪問、スサノオの高天原（たかまがはら）からの追放とヤマタノオロチ退治、ヤマトタケルの朝敵退治と悲劇的死去、山幸彦（やまさちひこ）の「わたつみのいろこの宮」（海神宮）訪問、大国主（おおくにぬし）の「根（ね）の国」訪問と女性遍歴などとなろうか。

黄泉の国、わたつみのいろこの宮、根の国は、いずれも「異界・異郷」である。異界に旅立った人間は、それゆえ「異人」としての神秘的な女性と交わり、同じく「異人」としての怪物を退治する。そして、異界から不思議な宝物を持ち帰る。

大国主や山幸彦の神話の結末がはっきり示しているように、彼らは異界から現実社会へと帰還してくる。そして、現実の社会に居場所を占める神社の「祭神」となったり、日本社会の支配者である天皇家の祖先となったりする。虚構の神話が、かくて「現実＝真実」のものへと昇華してゆく。

神話の再生

人間の世界は、複雑怪奇である。そこで暮らす人間の心には、ありとあらゆる感情が生起する。

島根県大東町で行われる〝ヤマタノオロチ退治〟の出雲神楽

八重垣神社（松江市）の本殿壁画のスサノオ

だから、「現実を模倣」して作られた神話には、ありとあらゆる要素と心理が含まれている。しかも、神話の出来事は人間社会の事物の「起源」ないし「祖型（アーキタイプ）」とされるので、きわめて誇張され肥大化している。その虚構化の度合いが大きければ大きいほど、現実世界をまるごと肯定するエネルギーの絶対値も大きくなる。ここが、「少年よ神話になれ」と言いつつ現実からの不毛な逃避を描くアニメーションと、本当の神話との最大の相違である。

ミヒャエル・エンデ『はてしない物語』が鋭い警鐘を打ち鳴らしたように、神話や物語などの「空想世界」への逃避と「現実否定」は、文学と人間世界を痩せ細らせる。現実と文学世界（神話・物語・小説）とは、バスチアン少年が手にしたアウリンというメダルにきざまれたウロボロス文様のように、互いが互いを支え合わねばならぬ。

受験地獄とリストラ地獄にさらされている若者や中高年の人々にとって、現代社会は何と生きづらいことか。彼らは、魂の救いと癒やしを求めて「歴史小説」の世界に分け入る。そこには、有象無象の（傑作から駄作まで）多様性が確保されている。まさに、「神話の森＝異界」への旅立ちである。その森で、神話の英雄たちのように「宝物＝生きる指針」を手にして現実世界に帰還できるかどうか。

「現実世界を生きる知恵」を読者に授けて「現実に帰れ」と教えてくれるのが、歴史小説の傑作である。いつまでも、空想の世界で夢を見つづけなさいと誘惑するのが、歴史小説の駄作である。前者は薬であり、後者は毒である。

吉川英治の傑作『宮本武蔵』は、お甲（こう）という「毒婦」や、お通（つう）という「鬼女」（あえてそう言わ

せてもらう）の誘惑から逃れつづける武蔵と、お甲や朱実（あけみ）という「悪女」の誘惑に吸引されつづける本位田又八（ほんいでんまたはち）とを描き分ける。そして、読者は又八のようになってはならないと教えられる。同時に、逃げる武蔵の姿もまた真実の「現実の肯定」ではないと教えられる。

神話を肯定的に現代文学に再生させた好例を、具体的に紹介しよう。

安部龍太郎（一九五五〜）の近作に、『海神（わだつみ）　孫太郎漂流記』がある。江戸時代の船乗りの少年が南洋に漂流して、苛酷な試練、恋、怪物退治などを体験することで人間として成長してゆくというストーリーである。神話の大国主が異界で「蛇の室（むろや）」や「百足（むかで）と蜂の室」に閉じ込められるという試練に耐えたように、孫太郎は異国で奴隷としての束縛生活に耐える。この『海神』が神話世界を重ね合わせていることが明瞭となるのは、「族長の首」という章である。

孫太郎は、親友の命を助けるための条件として、強力な族長の首を取ることを要求される。孫太郎は、盛大な酒宴の開かれている村に潜入し、女装して族長に近づく。そして、一気に彼の首を切り落とした。この場面の骨格は、「女装による怪物退治」という神話的発想に依拠している。ヤマトタケルが女装によって強敵に接近し、油断させ、他の方法では退治できなかったであろうクマソタケルを見事に屠（ほふ）ったという神話が、その典型である。

孫太郎は、その直後に首を抱えて逃亡する。追っ手に追われつつ、次々に物体をうしろに投げ捨て、かろうじて死地を脱した。これは、イザナキが黄泉の国の鬼となった妻のイザナミから逃げる途中で、次々と身につけていた物体を放り投げた神話の換骨奪胎である。

『海神』は、孫太郎が自分の生きる現実（南洋）から逃避して日本（もはや異界）に帰国するので

はなく、愛する家族のいる現実世界（南洋）に留まる決意をする感動的な場面で終結する。神話の趣向を用いることで、手に汗握るリアリティを冒険の随所にちりばめた『海神』は、「現実の肯定」という神話的主題を最後に高らかに歌い上げる。孫太郎にとって、日本に帰ることより旅先に定住することが「現実」であることを、読者に納得させ共感させ、この神話的な歴史小説は終了する。それが孫太郎の「新しい現実」の開始となる。

なお、安部龍太郎は『神々に告ぐ』でも、イザナキが黄泉の国でイザナミのおぞましい姿を見てしまう場面や、サホヒメが兄の言いつけに従って夫の命を取ろうとしてできないという神話の名場面を、室町後期を舞台として効果的に引用（リライト）している。

読者は、過去や現代の歴史小説を読む際に、「ここが神話のストーリーや人間関係の引用である」という分析は、おそらくしないであろう。けれども、無意識のうちに「神話的思考様式」を読み取り、そこにリアリティを感じ取っているのではなかろうか。

神話的思考様式とは、例えば「海の底で塩吹き臼（うす）が回っているから、海水が塩からいのである」という因果関係である。虚構の出来事（最初の一回）をありありと幻視することで、「海水は塩分を含んでいる」という現実に愛着を持ち、納得する。

神話の呪縛力

神話の構造を利用することで、文学作品にはリアリティが注入される。例えば『源氏物語』には山幸彦の神話の発想様式が巧みに利用されている。

兄の朱雀帝に迫害された弟の光源氏は、須磨・明石の海岸地帯を足かけ三年間さすらい、明石の君と結ばれ「夜光の玉」のような姫君に恵まれた。帰京後、光源氏は兄の朱雀帝を圧倒し、絶対的な権力を築き上げる。この「貴種流離譚」の話型は、山幸彦の神話のストーリー作成能力を借用している。兄の海幸彦から迫害された山幸彦は、「わたつみのいろこの宮」で豊玉毘売と結ばれ、「シオミツ玉・シオヒル玉」の二つの玉を授かる。人間世界に立ち戻った山幸彦は、異界で入手した玉の呪力で兄を圧倒して権力を奪取した。このような神話に支えられた『源氏物語』が、以後の日本文学のヒーロー像の永遠の規範となったのである。

また、神話には、「女性の犠牲による英雄の復活」とか「強い女性の援助による弱い男性の立ち直り」というストーリーが描かれることがある。舟が沈みそうになったヤマトタケルは、妻のオトタチバナの犠牲で命を永らえたし、大国主も妻スセリビメの援助で根の国の試練を乗り越えた。

このストーリーをほとんど無意識のうちに利用して、重病を患って海岸に捨てられた御曹司（源義経）を愛人の浄瑠璃御前が砂浜から掘り出して救出する話や、姉の安寿が命を捨てて弟の厨子王を逃亡させる『山椒大夫』などがリライトされてくる。『竜馬がゆく』冒頭の泣き虫の弟と男まさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com